

## 実質赤字 10 兆円弱を収支差ゼロと表示する厚生年金の不思議

(週刊ダイヤモンド「データフォーカス」欄、2005 年 9 月 24 日号)

一橋大学教授 高山憲之

本年の 3 月、2005 年度における厚生年金の財政状況(予算ベース)が、厚生労働省から公表された。それによると、収入合計額と支出合計額はともに 38.6 兆円となっており収支差はゼロである(図 1)。

厚生年金特別会計は最近、赤字幅を年々拡大していた(図 2)。その実質収支は 2002 年度から赤字に転落し、2004 年度には 5 兆 1000 億円の赤字を計上していたのである。

2004 年の年金改正により、この赤字基調が一気に反転し、早くも収支トントンになるのかと錯覚させるような表示である。

しかし、発表内容を詳しく吟味してみると、赤字基調が事実上さらに拡大していることがわかる。2005 年度の収支は実質 9 兆 8000 億円の赤字である。

収支差ゼロと実質赤字 10 兆円弱では理解の仕方が随分違ってしまう。なぜ、このような違いが生じるのか。

図 1 の収入項目には、前々から厚生年金基金の代行返上に伴う積立金の移管分が含まれていた。ただ、この移管分は一回限りの臨時収入であり、永続的に発生しない。財政の実力を正しくみるためには、この移管分を収入項目からはずしておいた方がよい。農林年金統合に伴う移管金も同様である。図 2 はこのような移管金を収入から除外して描いてある。

もう一つ、2005 年度から「積立金より受入」が収入項目に追加された。これは積立金の取崩し分にほかならない。積立金は 138 兆 8000 億円から 132 兆 3000 億円に減る見込みである。

積立金が減るのに収支はトントン このような不可解はフローとストックがうまく結びついていないことに起因している。

キャッシュベースで過不足がないことを示したいのかもしれないものの、収支差ゼロという表示は厚生年金財政の実態を誤解させる粉飾だといっても過言ではないだろう。

「積立金より受入」を収入項目に新たに設けるのではなく、むしろ収支差を赤字表示してフローとストックの整合性を図るべきではないのか。素人にもわかるような財政状況の表示方法がいま厚生年金特別会計にも求められていると思えてならない。

# 図1 厚生年金特別会計2005年度予算

収入・支出(兆円)

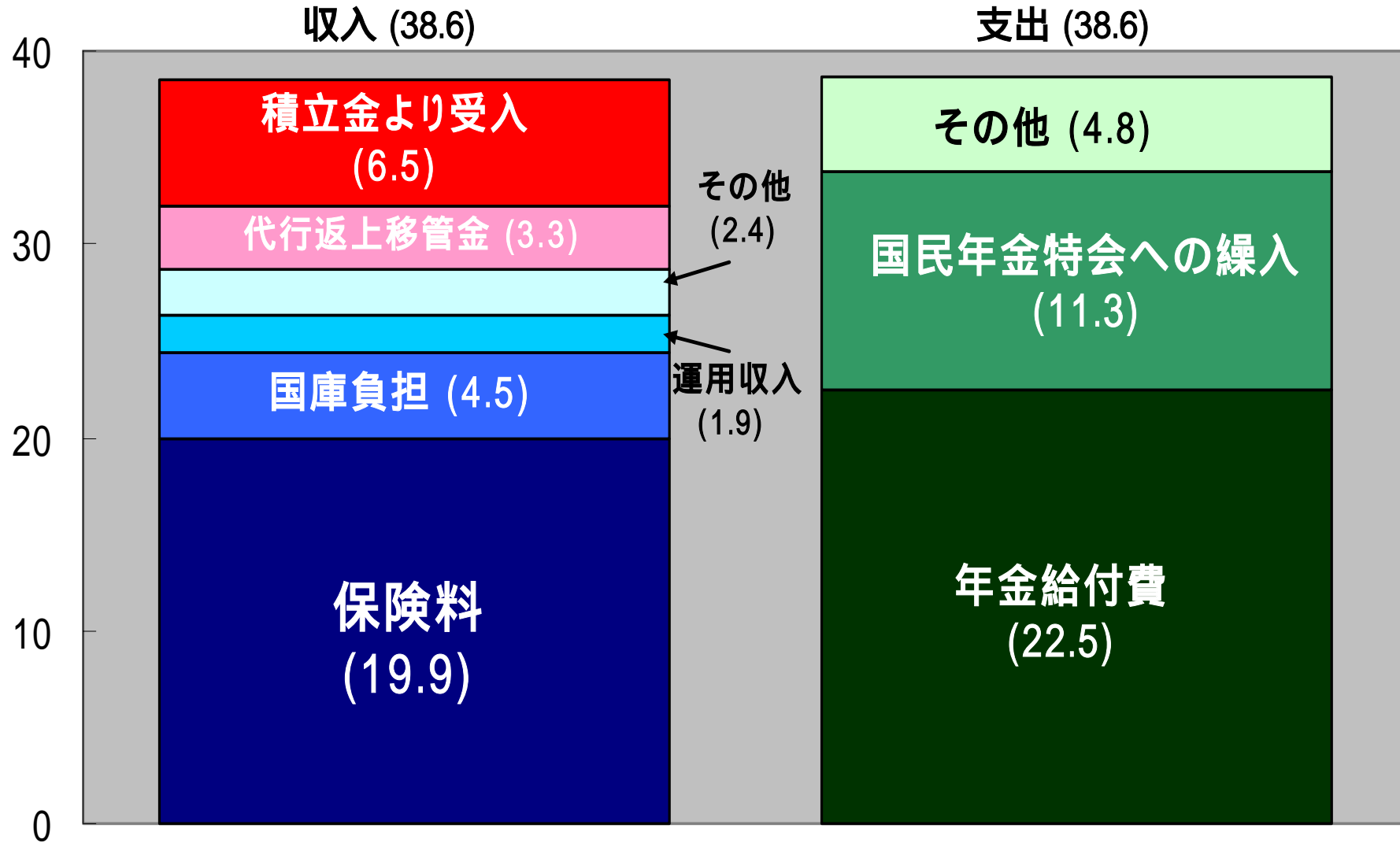
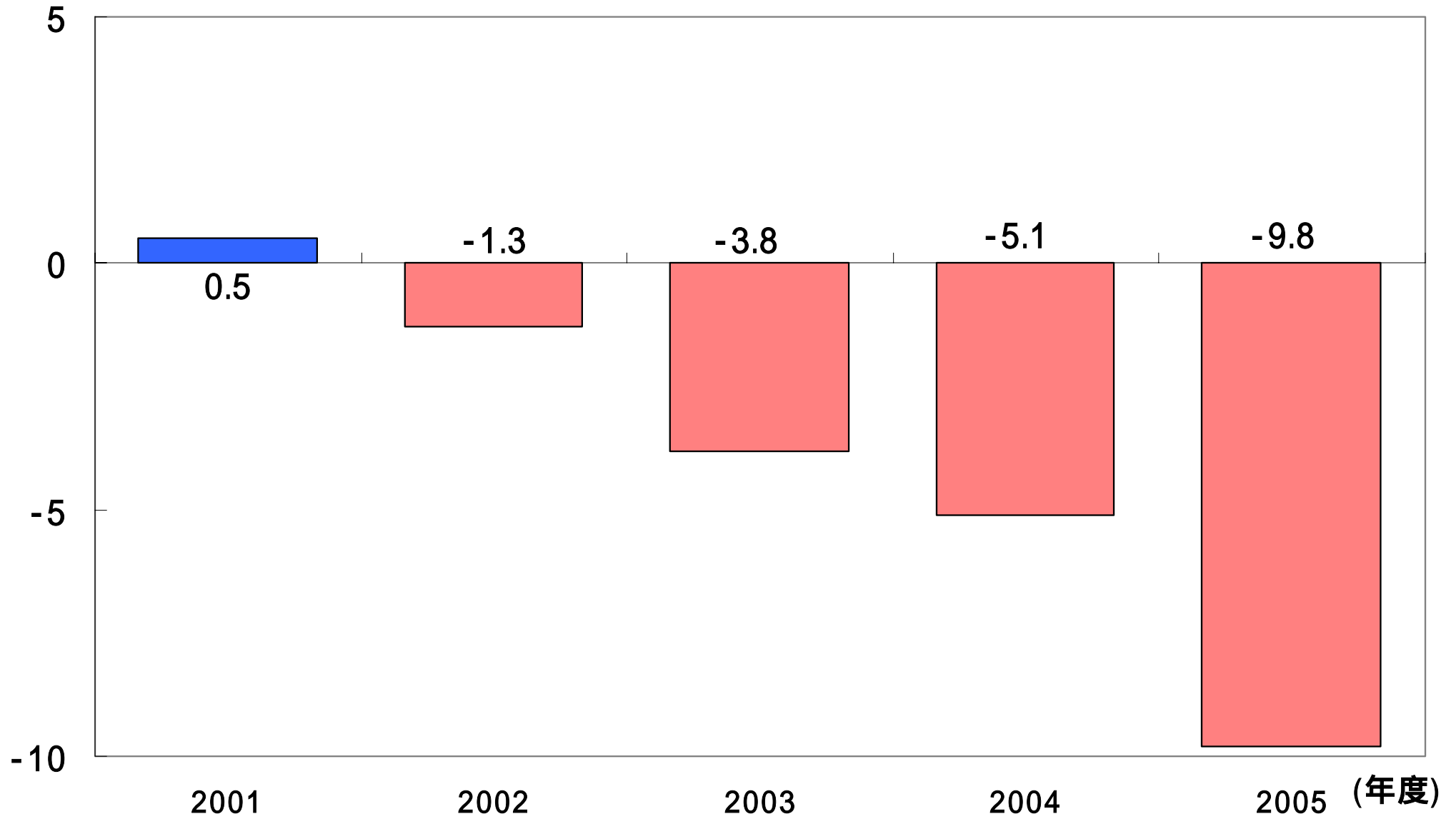


図2 厚生年金の实质収支

収支差(兆円)



注) 2005年度は当初予算ベース。その他の年度は決算ベース。代行返上等移管金を収入から除外。